演題番号27

麻痺肢の失敗経験により使用が停滞していた慢性期脳梗塞症例
- 物体把持の特徴に基づいた介入の試み -

○池田 勇太[1)] 赤口 諒[1,2)] 奥埜 博之[1)]

1) 摂南総合病院 認知神経リハビリテーションセンター
2) 畿央大学大学院 健康科学研究科 神経リハビリテーション学研究室

【はじめに】
上肢麻痺の重症度に関わらず，長期間の低活動によって二次的に不動に陥る症例は多く，その要因はさまざまな報告がある．今回，感覚障害や運動麻痺が軽度にも関わらず，麻痺肢の使用が停滞していた慢性期脳梗塞症例に対して，把持力の視点から病態解釈をして介入を試み，良好な結果を得たので報告する．

【症例紹介】
右半球脳梗塞発症より約5年経過した80代女性．約半年前から麻痺肢の使用困難を自覚し，健側優位で生活をしていた．BRSは上肢・手指VI．手指に軽度の異常感覚を呈しており，上腕二頭筋，腕橈骨筋の筋緊張の亢進を認めていた．Motor Activity Log（以下，MAL）では使用頻度2.7，動作の質2.8で，主訴は麻痺肢使用時の疲労感と物体把持時の失敗経験であった．物体把持では母指の適切な対立が困難で，過剰な母指内転・IP屈曲がみられていた．また，他動的に物体把持を試みると物体と接触する以前から母指と示指の過剰動員を認め，物体の表面特性の認識が困難であった．

【把持力評価】
30mm^{3}の立方体形状で3種類の重量設定が可能な測定装置（テック技販社製）を母指-示指-中指で把持した際の把持力を評価した．両側ともに重量に応じた把持力調節が可能であったが，過剰出力（患側11N）を示した．

【病態解釈】
異常感覚や長期間の低活動による手指運動の拙劣さの増悪に伴う失敗経験により，代償的な過剰出力で物体の滑落を防いでいると考えた．結果，適切な体性感覚情報に基づいた力の調整が困難となっていると推察した．

【介入と結果】
物体把持時の母指の対立運動を想定した課題設定で，他動的に物体を把持させ，接触のタイミングに注意喚起し，物体の表面特性（3種類）を識別する課題を実施した．結果，物体の表面特性の認識が向上し，過剰出力の軽減（患側7.5N）を認めた．また，上腕二頭筋と腕橈骨筋の筋緊張が軽減した．さらに，MALは使用頻度4.8，動作の質4.1と改善した．

【考察】
上肢使用が停滞する要因はさまざまな報告があるが，過剰出力による手指動作の拙劣さが病態背景の一要因となっている可能性が示唆された．このような手指機能の問題に対して，認知課題による介入は有用な手段であると考える．

【倫理的配慮，説明と同意】
発表，計測に先立ち症例に本発表の趣旨と内容に関して詳細な説明を行い，同意を得た上で実施している．